

# 京鹿子

中国书画函授大学肇庆分校  
肇庆分校函授部  
肇庆分校函授部

8月号

## つぶやき

豊田都峰

俳句は「有季定型」である。その「型」と葛藤することが内容の向上を計るただ一つの手段である、とも考えている。しかし、まったくの作りごとを創作しようものではない。現時点の私の思索の到達点でしかない。そして、やはり概念でしかない。

概念がすべての具象にただちにつながるなら、学者や理論家が良い作品を作ることになるが、人間の能力はそんなに短絡的ではない。作品形成に長い月日が、経験が、体験が必要となるゆえんである。「とほさ」を、「ゆふぐれ」を、作品に出しようとしての私の歳月はたしかに長い。しかしながらの前述の囚われ方である。それは、逆に言えば「俳句」の深さである。

「俳句」を選んだものの宿命である。「俳句」は誰でも作れるが、「俳句」は誰でも作れない。要は、その次元の問題である。私も、最初は「とほさ」という文字を詠いこめば、「とほさ」が表現できるという次元から出発している。が、いまは「とほさ」に「とほさ」の文字はむしろ不要という次元に立ち到っている。いわば喋っては「俳句」にならないという次第である。喋らない「俳句」。心象風景を喋らないで表出した。喋れば底がわれてしまうので、深さにつながるな。そんな分かりきったことを、いまつぶやいている。

(出典「わが里山帖」より)

豊 田 都 峰

灌 響 集 その二十四

郭 公 の 呼 ぶ や 浅 間 は 晴 れ つ づ き  
郭 公 の さ そ ふ 林 を ふ も と と す  
山 の 灯 に 計 る 時 の 日 の ひ と 日  
枇 杷 す す る 遠 く の 雨 の 灯 を お き て  
翁 追 へ ば 青 葉 を か ざ す 御 堂 筋  
白 南 風 や 島 ま る ご と の 歡 喜 か な



白南風や浜のひとは表裏なし  
寺かこむ林雨安居のたたずまひ  
あめ色の読めぬラベルや梅酒棚  
一隅もあまさぬ慈悲の青葉風  
青葉闇念仏と湧く百献灯  
風かをる念仏無心ゆゑなれば  
棟たかく総本山の青葉光  
人籟をつつむ青葉の大遠忌

# 草 矢 丸山佳子

大 王 崎 の 垂 る 日 柱 に 草 矢 射 る  
旅 ぞ ら へ 草 矢 を は な つ 気 安 さ よ  
夏 の 爐 に 眉 を こ が し て 猫 老 い ぬ  
夏 島 へ つ ば さ の ひ ろ き 帽 も と む  
二 番 子 を そ だ て つ ば く ら 能 登 を 去 る



# 秀華採集

一筆箋のその一その二春の逝く

北川 孝子

季語を「春の逝く」と設定したことがすべて。書き終わったが、次々に湧く思いをもたらす時である。「その一その二」の措辞もたのしい。「その三」も続くことであろう。

絵図面の霞むあたりに羅城門

山 中 志津子

風評に右往左往の糸柳

赤 松 鈴 江

羅城門も壊れた後再建はなかったと聞くが、まさしく「絵図面」のしかも霞むあたりとする設定の春がうまい。後句の「風評」の使い方に感心した。

鈴鹿 仁

かたつむり

かたつむり角の向かうの大遠忌

涼しさは悟りのなかの韻となり

円相や反り深めたる灼け藁

一番星妣にひとこと端居かな

七変化ひぐれの彩の息遣ひ

近 詠

和田 照海

桜鯛

乙姫の領巾の沖なる桜鯛

抽斗にしほさみ通ふ桜貝

はこべらや夕爾の釣場みず急ぐ

ゑんどうの皮剥く小指あそばせて

琴材の野晒し干や紫雲英草

# 神麓集



土 筆 北村 香朗  
 病室に土筆を摘みて長男来  
 見舞客さんざ弾めり花 荆すずら  
 地震あとの都忘れは刻のまま  
 小粉団の咲き初めたり狭庭べに  
 小粉団の花は裏木戸すぐ脇に

服部 郁史  
 千代紙で雛折りくれる男の掌  
 折り雛の開かれさびしい幾直線  
 折り紙に日永の陰が来る疊  
 まんさくに雲厚き日の肘痛み  
 花に酌む男がひとり点る時

鱧 力 藤岡 紫水  
 今更と見直す家紋桐の花  
 釣糸に跳ねてなけなし鱧力  
 胸で水ひらく母の日の白鳥  
 三世代睦む藁屋や吹流し  
 家風など無き我が家にも武具飾る

竹貫 示 虹  
 八月は  
 すぐそこに黄泉の遠さの夕かなかな  
 いつまでも戦後のおもひ火のカンナ  
 八月や不沈戦艦海底に  
 桐の花うしる見るなど言はれても  
 臨終の瞳に生涯の走馬燈

働哭の海 松田 都青  
 働哭の海を見にゆく花のあと  
 蛇打つや貧しき言葉しか知らず  
 真中に棒垂れ下がる日永かな  
 詩の中の言葉のやうに五月来る  
 先頭もしんがりもなく行く日永

青 葉 柴田 朱美  
 いちまいの旅信はらりと青葉風  
 青葉濃し女に知性派感覚派  
 杉の香の強き割り箸青葉雨  
 青葉閑け水の饒舌はじまれり  
 青葉濃し山のうしろに山ありて



# 神麓集



新緑の生垣頼りに試歩練習  
 山田をがたま  
 梅雨に入り独り廊下を試歩練習  
 天眼鏡頼りに字書く梅雨暗し  
 寝返りに激痛走り明易し  
 二年ぶり梅漬ける気力とりもどす

若 桜 丸井 巴水

欄干に肘つき一目惚れ桜  
 花三分靴音のみの恵比須橋  
 花はじめソワレに残す戀ひとつ  
 川幅は三步さくらの吹雪く橋  
 死期悟る卓越はなし花疲れ

三・一一 小堀 寛

朧月どぶろくならべ翁かな  
 山姥と海姥並ぶ春ツ波  
 船は屋根へ熊沖へ出る春の海  
 原爆は父原子炉は母春の闇  
 二二六八一五三一吾ガ雪月花

熊野古道名なき祠の滴れり  
 大村美知子  
 巢箱かけ巢立ちはいつも知らぬ間に  
 貴婦人を粧うてみる夏帽子  
 加茂の水牛車の軋む古都薄暑  
 昏れぎはの風むらさきにあやめ畑





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

一筆箋のその一その二春の逝く

京都 北川 孝子

風評に右往左往の糸柳

海道忘語らひ永久に熱かりし

落椿鎮守の杜の木々の騒

春日遅々もて余しゐる第六感

春荒野リスの日課に変はりなし

アツチ 伊吹 之博

さくらしべ己れ励ます十指組み

米人に端午伝へし昼休み

絵凶面の霞むあたりに羅城門

京田辺 山中志津子

大西日今日の成果を我に問ふ

追ひつけぬ人よブランコ深く漕ぐ

会議果つ子から写メール花いちご

春燈の一滴を足す備忘録

春うららファームに遠足嬉ぶ娘

カワムラア 南 映佳

リラ匂ふドガの踊子出番待ち

春近しチャリテイー集ひし広がる輪

文字摺草穂先はますぐ空にあり

福知山 赤松 鈴江

春の宵熱気歓喜のダービーレース

金鳳華夕日てらてらまたあした

春の昼あちこち寝たる牛の群れ